

映画『ブリュエルの動く絵』公開

レフ・マイエフスキ監督インタビュー

## ブリュエルの絵画と現代アートの乖離

数々の映画制作にかかわる他、ビデオアートなどを手掛けるアーティストでもあり、詩人、舞台演出家でもあるレフ・マイエフスキ。今回、ブリュエルの《十字架を担うキリスト》を題材にした映画をつくり、宣伝のために来日した。映画の話だけではなく、痛烈な現代アート批判も飛び出したインタビュとなった。



レフ・マイエフスキ

■ブリュエルの絵画を題材に映画を撮ろうと思ったきっかけは何でしょうか？

ウィーン美術史美術館にあるブリュエルの傑作絵画群、《パベルの塔》や《雪の中の狩人》、そして《十字架を担うキリスト》を見ていて恋に落ちてしまいました。彼自身がつくりあげた物語に惹かれたし、非常に映画的だと感じました。キャラクターがフェリーニの映画から飛び出してきたような感覚を受けましたね。ブリュエルの絵自体を映画にしようという気は最初はなかったのですが、マイケル・フランシス・ギブソン著の《十字架を担うキリスト》について

考察した書籍『The mill and the Cross』がきっかけになりました。

その本を読んでイメージがすぐに浮かび、ブリュエルの映画を創るのは今しかないということと告げられたような気がしました。でもアートエッセイをベールに映画を描くなんて馬鹿げているともギブソンは言っていたわけですが(笑)。

■この映画に描かれている物語は、現代にも通じる寓話だと感じました。監督にもそのような意図はありますか？

私は作り手であるので自分で分析はしないほうが賢明かと。ただし、作品を創りあげる構造として、様々な逆の要素、反作

用的な要素が内包されています。

ブリュエルのについても、逆の要素が自分の中で共存していることを作品で示していると思います。喜びすぎることはいくもない、悲しすぎることも良くない、すなわち善と悪の距離さえ分かっていないのだから、というような言葉があります。そのような思考を持ったアートはとも興味深い。それに比べて現在のアートは思考があまりにも欠けていますね。

■現代のアートにはブリュエルの持つ哲学や思考が足りないということでしょうか。

前述の、ブリュエルのたった1枚の絵についての320頁

ました。木から彫りおこした原始的なたちの足を赤く塗った作品です。そのずつと奥には本物のミケランジェロのダビデ像があるのですが、どうしようもないものがまず最初に置かれている(笑)。これが500年分の美術の進化といえるのでしょうか？ まずアートがあり、その後20世紀が始まると同時にアートの乱用、悪用が始まってしまったのです。

■なぜそのような状況になってしまったとお考えですか？

ビジネスがそれを許容してし

まったから。ある意味病のようなものでしょうか。とても深く難しい問題だと思いますね。でも考えてみたらフランコ、ヒトラー、スターリンなどはその方向性を止めようとしていたようにも思える。彼らがしたことは無謀な策であり、失敗だった訳ですが。それは置いておいて、人々は美と神、そういった存在と離れてしまったのではないのでしょうか。現在の語彙の中でビューティーというのは禁じられた言葉のように感じます。アーティストとしての義務とい

うのはまず皮肉、ポストモダンの感覚あり、ジョークが使えなければいけない。逆にシリアスにいきいたいということであれば、本当に危険な分野に行くことになる。私が現代の文脈に400年前の意識を持ち込んだ為に、何故かアヴァンギャルトと呼ばれるようになってしまいました。私はできるだけモダンアートから離れようとしているだけです。それは自分を断絶させるものであり、そうした作品を創るアーティストの皆は刑務所に送られてもいいと思います(笑)。



ピーテル・ブリュエルの《十字架を担うキリスト》  
1564年 124 × 170cm 美術史美術館

## 新作映画情報

### 『ブリュエルの動く絵』



ルドガー・ハウアー扮するブリュエルが案内人となり、フランドルの民衆の懐かしい日常生活をなぞりながら、名画《十字架を担うキリスト》に秘められた意味を解き明かしていく。まるで絵のなかに入り込んでしまったような、不思議な体感型アートムービー。

12月17日(土)渋谷・ユーロスペースにて公開 他全国順次

監督/製作:レフ・マイエフスキ  
脚本:マイケル・フランシス・ギブソン、レフ・マイエフスキ  
キャスト:ルドガー・ハウアー、シャーロット・ランプリング  
配給:ユーロスペース+ブロードメディア・スタジオ  
配給協力:コミュニティシネマ・センター



© 2010, Angelus Silesius, TVP S.A